

山崎 雅人 (大阪市立大学)

【要旨】

満洲語文語の具格接辞が*-i*と*de*の二種類であることは、河内・清瀬(2002: 70-71)や Gorelova(2002: 185)が記述し、後者は両者の差異に言及するが、その時制や人称による区別という説明が不適切であることは Liu(2018: 36-38)が例証している。本研究では、具格接辞が付く名詞だけでなく、後続の動詞も同一の場合に二つの接辞を使い分ける例の対照において、有界性を齎す数量情報を持つ名詞に*de*を用いることを有標化と考える。

当該例における数的概念による有界性は、古川(2001)が中国語の数量詞によって修飾される名詞句が認知上最も目立った“有界”の個体と指摘することに通じ、中国語の量詞「个」に関する大河内(1985)の「個体化」や量詞の文法化に関する橋本(2014: 193)の「グラウンディング」の概念に近い。

数詞が付かない名詞に対し、数的概念を付加した名詞は量的な拡がりの中での特定性を有する。位格接辞*de*を所在の意味から手段の意味に用いるのは、空間上の特定性、即ち「場所性」を拡張して「行為を成立させる手段」と解釈するためと考える。

1. はじめに

本研究は、以下の例文(1a)と(1b)が共に「薬で作った五香酒を飲む」との意味でありながら、「～を用いる」という具格の機能を表す接辞が異なるのは何によるかという問題を扱う。

(1a) *si-men-king okto -i araha u-hiyang nure omiki seme*, 『満文金瓶梅』(以下『金』) 第27回 19b5-6
西門慶 薬 具格 作る.完了 五香 酒 飲む.希求 言う.副動

「西門慶は**薬で作った五香入りの酒を飲む**うと思って」(原漢文: 西門慶要吃藥五香酒,)

(1b) *si-men-king emu siran -i ilan hūntahan okto de araha u-hiyang nure omifi*, 『金』 第27回 22b7-8
西門慶 一 続き 属格 三 盃 薬 具格 作る.完了 五香 酒 飲む.副動

「西門慶は立て続けに三杯、**薬で作った五香入りの酒を飲み**」(西門慶一連吃了三鍾藥五香酒,)

この言語の二種類の具格接辞の用例は、河内・清瀬(2002: 70-71)や Gorelova(2002: 185)が記述し、以下のよう
に後者は機能的差異に言及しているが、それには Liu(2018: 36-38)が反証しており、上記の(1a)(1b)も反例と
なる。なお、Gorelova(2002: 185)の具格接辞*-i*と*de*の差異についての記述は、Зараров(2010: 132)に基づく。

Both the genitive and the dative are used to indicate an instrument, but there is a difference between them. The dative is used with verbs in the past... The dative is used when people talk about someone else's activities: ... But when the question is about someone's own activity, then the genitive is used: ... Gorelova(2002: 185)

2. 使用する資料と具格の有標性

本研究では、主に小説『満文金瓶梅』(1708 序)の用例に加えて、会話書『tanggū meyen (一百条)』(1750?)と『清語老乞大』(1765)からの用例も分析し、具格接辞-i と de を比べ後者の特徴を有標化と考え、それと中国語の量詞の機能との共通性を指摘する。

具格接辞の無標・有標の違いは、山崎(2015)で論じた以下の例のように、物質としての「銀」と、それを人為的に加工した貨幣としての「銀子」の違いに見られる。前者が無標で、後者は有標と考える。

(2a) abka na gemu **menggun -i** miyamiha, gu -i sahaha adali oho,,第2回 4b6-7

天 地 皆 銀 具格 化粧する.完了 玉 属格 積む.完了 如し 成る.完了

「天地はすべて**銀で化粧し**玉が積んだようになりました」(却早銀粧世界,)

(2b) ere **menggun de** hobo udafi 第88回 11b6-8

指示 銀 具格 棺桶 買う.副動

「この**銀子で**棺桶を買って」(拿這銀子替我買一具棺材,)

また、名詞 *fafun* 《法・法度》は本来の「法」なので、具格用法の制度規範としては-i が付き、de を用いた例はない。これに対し、名詞 *kooli* 《しきたり・慣習・規範》という擬似的な「法」には、-i の例はなく de を用い、名詞 *šajin* 《法・禁令》も擬似的「法」すなわち宗教法として、de を用いる。

(3a) eici **fafun -i** gamafi,, gurun -i **fafun be** tob
或いは 法 具格 持って行く.副動 国 属格 法 対格 きっちり

obureo **sehebi,,** 第18回 6b1-2

なる.使役.未完.疑問 言う.過去

「あるいは**法によって**処罰して国の法を公正になすべしと言った」(或置之典刑, 以正國法。)

(3b1) **aniyai kooli de** bi hūi -i da ofi, 第14回 24a2

年.属格 例 具格 私は 会 属格 元 なる.副動

「**年のしきたりで**私は祭主となって」(該我年例做會首,)

(3b2) unenggi **fucihi šajin de** bahafi sui subure oci, 第8回 22a9

果たして 仏 法 具格 ~できる 罪 解く.未完 なる.假定

「果たして**仏法で**罪障を取り除くべきならば」(果然佛法能消罪,)

3. 使い分けの基準

本研究でふたつの具格接辞の使い分けの基準として述べることは、次の通りである。上記で見たように、具格接辞-i と de の違いは意味素性における無標・有標の差異で、本研究で扱う用例に関しては、前者にはない数量情報を後者が有することで有標性が表されると考える。

以下では、はじめにこうした同じ名詞に具格接辞が付き同じ動詞が後続する例を挙げ、次いで同じ名詞に具格接辞が付く(動詞は同じではない)例の順に具格名詞句に数詞の有無で対照的な例を取り上げる。

4. 用例

4.1 同じ名詞と同じ動詞を持つ例

(4a) basa bume turifi weilebure, **jiha menggun -i udafi** eture oci,
賃金 与える.副動 雇う.副動 工作する.使役.未完 銭 銀 具格 買う.副動 着る.未完 なる.仮定
「工賃を与え雇って仕上げ、**銭金で買って着れば**」『tangū meyen (一百条)』第1巻第22話30b3-4

(4b) te uncara niyalma akū ojoro jakade, **sunja jiha menggun de** emu ginggin udaci hono
今 売る.未完 人 否定 なる.未完 ので 五 銭 銀 具格 一 斤 買う.仮定 なお
baharakū,
得る.否定

「今は売人がいないので、**五銭銀で一斤買うこと**さえできない」『清語老乞大』第5巻6b1-3

(5a) pai tuwame amba **hūntahan -i omime** fonjime, 『金』第16回4b9-5a1
牌 見る.副動 大きい 杯 具格 飲む.副動 問う.副動

「牌を見つつ**大杯で飲み**ながら尋ねて」(兩個看牌, 拿大鍾飲酒。)

(5b) bi ainame ajige **hūntahan de juwe omiki** 『金』第33回8a8
私 どうにかして 小さい 杯 具格 二つ 飲む.希求

「私は**小さいので二杯飲み**たいものです」(寧可吃兩小鍾兒罷。)

(6a) jafafi moo **mukšan -i tantara de**, 『金』第86回16b1
取る.副動 木 棒 具格 叩く.未完 与位格

「取って**棍棒で叩**こうとすると」(拏棒槌短棍打了一頓。)

(6b) cananggi jang-šeng ehe weile arafi **tangū mukšan de tantame** waha, 『金』第100回5a1-2
一昨日 張 勝 悪い こと 作る.副動 百 棒 具格 叩く.副動 殺す.完了 (一百棍打死。)

「一昨日、張勝は悪事を働いたから、**百棒で叩いて**殺してしまった」

(7a) geli emu udunggeri **nujan -i tantafi** toome hendume, 『金』第11回9b5-6
また 一 幾度 拳固 具格 叩く.副動 罵る.副動 述べる.副動

「また何度も**拳固で殴り**罵って言う」(復回來又打了幾拳, 罵道:)

(7b) ere ajige gūwaidanahangge be uthai **emu udu nujan de tantahai**
指示 小 みすぼらしい者 対格 直ちに 一 幾つ 発 具格 殴る.継続
wara bihe, 『金』第43回10b2-3
殺す.未完 ある.完了

「この野郎めを直ちに**何発も殴り**まくって殺しやるところだ」(就一頓拳頭打死了)

例文(4a)(4b)では、menggun《銀》が単独使用時の例文(2a)(2b)の有標性とは異なり、jiha《銭》と共に「銀を材料とした銭」を意味する無標の「銭金」となると、有標の貨幣単位とは対立する意味を表す。例文(6a)の原漢文には「一頓」があるが、満訳文では数詞部分を訳出せず、裸の名詞として具格接辞-iを付けている。

名詞nujan《拳》と動詞tatambi《叩く・打つ》の組み合わせでは、-iは打撃部位としての「拳」で、deは打撃単位としての「発・撃」を表す。すなわち、例文(7a)は副詞emu udunggeri《幾度か》が動詞句「殴り」にかかる副詞であって、「いくつかの拳固で」ではない。身体部位である「拳固」が不定数であることはない。これに対し、例文(7b)は形容詞句emu udu《いくつかの》でnujan《撃・発》にかかり、「何発も」にあたる。打

撃回数は不定数でありうる。

○数詞がもたらす機能

以上の同じ動詞を持つふたつの具格接辞の例の対照から、de が付く名詞に先行する数詞の機能は「有界性 (telicity)」を示すことにあると考える。数的概念は、スケール上で隣り合う数との境を明示するもので、それが修飾する名詞に数の面で具体的な概念を付与する。その意味で、数的有界性は話し手により名詞が表す存在が特定される機能を持つと考える。

数的概念による有界性の表示は、沈家煊(1995)が「数量詞を付加することは、名詞を“有界”化する手段」と述べ、古川(2001)が中国語の数量詞によって修飾される名詞句が認知上最も目立った“有界”の個体と指摘することに通じ、中国語の量詞「个」に関する大河内(1985)の「個体化」や量詞の文法化に関する橋本(2014: 193)の「グラウンディング」の概念に近い。

数詞が付かない名詞が具格として無標であるのに対し、数的概念が付加された名詞は量的な拡がりの中での特異性という有標性を含意する。位格接辞 de を地名のように空間上の特定の位置を表す意味からある行為を行うときの手段の意味に用いるのは、「場所性」の概念の拡張により「その行為を成立させる基盤としての手段」を数的スケール上で明示的に位置づけるためと解釈される。

場所を表す機能的語彙が手段も表す例は、英語の in (write **in** ink 《インク**で**書く》、speak **in** English 《英語**で**話す》) や日本語の「で」にも見られる。

4.2 具格名詞は同じだが動詞は異なる例

(8a) bucehe gurun -i ilmun han sche seme, inu kemuni
死ぬ.完了 国 属格 閻魔 王 言う.完了 言う.副動 また 常に

hoošan jiha -i enchešeme baikini sembi,, 『金』第 57 回 19b6-8
紙 銭 具格 うまく取り入る 求める.希求 言う.不定

「閻魔の庁の十殿でも **札東**で何とでもなるとのことだ」(陰司十殿, 也要些楮鏹營求。)

(8b) ilan jiha de, gin-hūwa-nure udaki, juwe jiha de emu
三 銭 具格 金華酒 買う.希求 二 銭 具格 一

ulgiyan -i uju udafi, 『金』第 23 回 2a1-2
豚 属格 頭 買う.副動

「**三銭**で金華酒を買おう、**二銭**で豚の頭を買って」(三銭買金華酒兒, 那二銭買個猪頭來,)

前者(8a)は物質としての hoošan jiha 《紙銭》で、後者(8b)は貨幣単位としての jiha 《銭》である。

(9a) tehebi,, futa -i huthufi gajifi, turgun be sara jakade, 『金』第 100 回 17a6
座る.過去 縄 具格 縛る.副動 持って来る.副動 事情 対格 知る.未完 ので

「座った。**縄**で縛って連れて来ると、事情は分かっているの」(投住, 一條索子拴將來)

(9b) ušame tucibufi, emu sele futa de tabufi, dukai boode 『金』第 20 回 32a2
牽く.副動 出る.使役.副動 一 鉄 縄 具格 結びつける.副動 門. 属格 部屋.位格

「引っ張って出してきた**一本**の鉄の**縄**でくくって門番部屋に」(和粉頭一條繩子墩鎖在門房内。)

例文(9a)の原漢文の数量詞「一條」を満訳文は emu と訳さず、その結果具格接辞-i を選択したと考える。

(10a) geli cimari erde untuhun **nure -i** suitambi serahū 『金』第 95 回 20b6-8

また 朝 早い時 空の 酒 具格 注水する.不定 言う.懸念

「また朝っぱらから味気ない**酒でも**てなしたなんて言うんじゃないかと」(大清早辰拏寡酒灌酒他。)

(10b) ilan hūntahan -i nure de joboro hoton be fondoloho gojime, 『金』第 10 回 1b2

三 杯 属格 酒 具格 憂う.未完 都城 対格 突き通す.完了 雖も

「**三杯の酒で**愁城を破ったとは言え」(三盃酩酊破愁城。)

(11a) ekšeme morin ci ebufi, šusiha -i duka be toksime 『金』第 68 回 31a7-8

慌てる.副動 馬 奪格 降りる.副動 鞭 具格 門 対格 敲く.副動

「急いで馬から降りて**鞭で**門をたたきながら」(拿鞭兒敲着門叫道：)

(11b) aika ohode orin gūsin šusiha de hono wajirakū, 『金』第 12 回 29a1-2

もし 成る.完了 二十 三十 鞭 具格 未だ 終わる.否定

「そうになったら**鞭の二三十で**はととも止まず」(不善, 着緊二三十馬鞭子還打不下來。)

4.3 数的情報の位置

接辞 de を持つ具格名詞句には数詞が先行する例が多いが、以下は「数量詞遊離」の例と考える。

(12=(5b)) bi ainame ajige hūntahan de juwe omiki 『金』第 33 回 8a8

私 どうにかして 小さい 杯 具格 二つ 飲む.希求

「私は**小さいので二杯**飲みたいものです」(寧可吃兩小鍾兒罷。)

名詞句 emu ajige hūntahan 《一杯の小杯》もあるので、上記例の juwe 《二》は当該名詞句の冒頭に立つことも可能であるが、名詞の後ろに遊離したものと考える。

(13) niyalma tome aisin -i hūntahan de ilata hūntahan omifi, 『金』第 70 回 13a2

人 毎 金 属格 杯 具格 三 杯ずつ 飲む.副動

「それぞれ**金爵で三杯ずつ**飲み」(每人金爵飲酒三杯。)

上の例では、具格接辞が付く名詞と後続の数量詞の名詞が別個で同じ形態である。他方、これまでに見た具格接辞 de が付く名詞は、手段の機能と量詞としての機能を兼ねていると考える。

なお、例文(6a)(6b)で見た名詞 mukšan《棍棒》に具格接辞-i と数量情報が後続する以下の例は異なる構文で、名詞 undeheh 《罪人を叩く板》も同じく手段と量詞が分離している構文と見なされる。

(14) amba mukšan -i gūsin moo tantara jakade, 『金』第 12 回 17a7-8

大きな 棒 具格 三十 板 叩く.未完 ので

「大きな**棍棒で三十回**叩くので」(打了三十大棍。)

(15) tereci amba **undeheh -i** gūsin moo tantafi 『金』第 92 回 24a4

それより 大きい 板 具格 三十 板 叩く.副動

「そうして大きな**板で三十回**喰らわせて」(當下打了三十大板,)

この undeheh の場合は、具格接辞 de を用いた例はない。打撃の回数を表す量詞 moo 《木・板》を取る場合は有標接辞 de ではなく無標の具格接辞-i を取る例のみであり、これらふたつの名詞 mukšan と undeheh が接辞-i を取る構文を無標とすれば、aisin -i hūntahan de ilata hūntahan という方は有標の表現と考える。

4.4 数詞を取る接辞-i の具格名詞句

数詞が先行し具格接辞-i を取る例には、以下のものがある。

(16) ekšeme juwe okson be **emu okson -i** gardašame urgun arame jihe, 『金』第 30 回 19b1-2

慌てる.副動 二 歩 対格 一 歩 具格 大股で急ぐ.副動 喜び 作る.副動 来る.完了

「慌てて二歩を**一歩で**急ぎ足でお祝いをしに来た」(慌的兩歩做一步走來賀喜。)

この具格接辞-i が付く okson 《歩み》には対照となる接辞 de を用いた例がなく、上記の undeheh と同じく無標の具格例と考える。

名詞 gisun 《言葉》にも、数詞に後続して具格接辞-i が付く例がある。

(17a) tutu ofi teike **emu juwe gisun -i** simbe korsobuha, 第 5 回 3a8-9

そのように 成る.副動 今しがた 一 二 言葉 具格 君.単数.対格 怨む.使役.完了

「それだからさっき**ひと言かふた言**でお前を怒らせたんだ」(我方纔把兩句話來激你,)

これは具格接辞の使用としては無標であり、聞き手を怒らせるという行為を成立させる手段が「ひと言ふた言」の言辞ということである。これに対して、同じ名詞に具格接辞 de が付く例では、動詞に wajimbi 《終わる・完了する》を取る例がある。

(17b1) ejen sabufi fonjici, inu damu **emu gisun de** wajimbikai, 『金』第 24 回 3a4

主君 見る.副動 尋ねる.假定 また 只 一 言葉 具格 終わる.語気詞

「旦那様が見て聞いてきたら、またたつた**ひと言**で済むものだろうかね」(只說得一聲。)

(17b2) ineku mini sain de dele genefi, **emu gisun de** uthai wajiha,, 『金』第 46 回 8a7-8

元の 我が 良い 与位格 上 行く.副動 一 言葉 具格 即ち 終わる.完了

「やはり俺が罷り出ては**ひと言**で直ちに**けり**が付いた」(還虧我到上頭, 一言就准了。)

(17b3) **emu gisun de** wajirakū, 『金』第 94 回 27b4

一 言葉 具格 終わる.否定

「**ひと口**では**申**せません」(一言難盡。)

動詞 wajimbi と組み合わせられて「ひと言で済みます」という意味の慣用句では、接辞 de のみが用いられてい

ることは、この動詞が含意する「有界性」の概念が関与していると考えられる。すなわち、言葉を「言い終える」地点、すなわち当該行為の「境界」は「場所性」の概念を含意するが、他方、無標の例文(17a)の「怒らせる」という心理行為は、「ひと言ふた言」という言葉の量が表す有限性に基づくことではないと考える。また、同語反復の形式で具格接辞-iを持つ例も数詞を伴うが、これは単位としての名詞と考える。

(18) emu guise, emu guise -i juweme gemu taktu -i ninggute sindaha,, 『金』第 59 回 2b2

一 櫃 一 櫃 具格 運ぶ.副動 皆 楼 属格 上に 置く.完了

「ひと箱ひと箱と建物の上階に運び上げた」(一廂廂都堆卸在樓上。)

こうした数詞 emu 《一》+名詞+i という形式は計量単位としての具格名詞句で、下の yan yan -i は有界性を含意する数詞を持たずに重複して不定数を表す形式であり、共に特定の固定的表現と考える。

(19a) menggun be yan yan -i beyede ashafi, 『金』第 22 回 10a2

銀子 対格 両 両 具格 身.与位格 帯びる.副動

「銀子を何両も身辺に置いて、」(只銀子成兩家帶在身邊)

(19b) dade emu minggan ilan tanggū yan de udaha bihe,, 『金』第 70 回 19b1

始め 一 千 三 百 兩 具格 買う.完了 ある.完了

「あの拙宅は千三百兩で買ったものです」(舍下此房原是一千三百兩買的。)

5. おわりに

本研究は、具格名詞を持つ動詞句の主要部名詞と動詞が同じ用例を比較するところから、具格名詞だけが同じ例も含めて比べることで、二つの具格接辞の使い分けに数量情報が名詞に有界性を付与することにより位格接辞 de の「場所性」が拡張され、具格の機能として解釈されることを初めて主張した点である。

参考文献

- 沈家煊(1995)〈“有界”与“无界”〉《中国语学》第 5 期, pp.367-380.
- 古川裕(2001)〈外界事物的“显著性”与句中名词的“有标性”——“出现、存在、消失”与“有界、无界”——〉《当代语言学》第 4 期, pp.264-274.
- Gorelova, Liliya. (2002) *Manchu Grammar*, Brill.
- 橋本永貢子(2014)『中国語量詞の機能と意味—文法化の観点から—』白帝社
- 河内良弘・清瀬義三郎則府(2002)『満洲語文語入門』京都大学学術出版会
- Liu Qingling (2018) 「日本語と満州語の与格の対照研究」立命館大学修士論文
- 大河内康憲(1985)「量詞の個体化機能」『中国語学』第 232 号, pp.1-13.
- 山崎雅人(2015)「満洲語文語のふたつの具格」『日本言語学会 第 151 回大会予稿集』pp.294-299.
- Захаров, Иван Ильич (2010) *A Grammar of Manchu (Грамматика Маньчжурского языка)*, with an introduction by Alexander Vovin (Languages of Asia classic texts, v. 1) Global Oriental.